

一、次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。⑤⑥は送りがなをふくめて書きなさい。

- ①市役所にキンムする。
②東南アジアをレキホウした。
④結果的にA君にコウサンする。
⑤両親をウヤマウ。

二、次のⅠ・Ⅱの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

Ⅰ 指揮者の佐渡裕さんは9月、ブルックナーの交響曲第4番「ロマンティック」を初めて振った。兵庫芸術文化センター管弦楽団の定期演奏会。これまでブルックナーに興味を感じず、あまり振らなかったが、53歳にして挑戦した。

出来栄えは「私にしか鳴らすことができない音が鳴った」と満足しているが、その一方で「①僕の指揮者人生もようやく第1楽章です」と、出発点に立った気分だという。

世界的な指揮者と言われる佐渡さんである。来年は「音楽の都」、ウィーンの名門、トーンキンストラ―管弦楽団の音楽監督に就任する。楽団の選曲、人事、運営などいわば経営戦略に責任を持つ「社長」の役割を演じる。それなのに第4楽章ではなく、「第1楽章だ」とワクワクしているのはなぜだろうか。

佐渡さんは近著「棒を振る人生」に「オーケストラが指揮者にひたすらつき従う巨匠が活躍する時代はすでに終わった」と書いた。*カリスマ的な指揮者に奏者が絶対服従するスタイルはカラヤン（1989年没）、バーンスタイン（90年没）が亡くなって、終わったというのだ。

それから四半世紀が経ったのに新しい指揮者像は「*混沌としている」と佐渡さんは言う。第2次世界大戦を経験した指揮者や奏者が音を創り出した時代は、②トツプダウンで事が済んだのかもしれない。

*冷戦後と重なるこの四半世紀は、戦後生まれが指揮者となり奏者となった。多様な価値観を持った人たちで、自由に議論できる時代に育った人たちである。指揮者もリーダーも、③新しい姿を目指さざるを得ない。

④ボトムアップの要素も組織運営に取り入れれないと時代に追いつけないし、新しい価値も生み出せない。

だが、コンサートという一瞬の判断が勝負になる現場ではボトムアップは不可能だ。リハーサルで大衆討議をしても演奏が始まれば、奏者や観客の「気」を感じた指揮者が一人で決断する。それが一瞬で消えてしまうが人を感動させる音づくりの(a)妙である。

トツプダウンとボトムアップの微妙なバランスをどう保つのか。「結果が間違っただとしても、⑤この人とやってみようという信頼感が、指揮者と奏者の間にあるかどうかが問われる時代なのではないか」と佐渡さんは指摘する。

多様な奏者の意見を聞く。その対話の過程で信頼感が生まれ、現場の一瞬の指揮者の決断にも、みながやってみようと追随する――。そんな指揮者像が見えてくる。

佐渡さんのウィーンでの挑戦は、多様な価値観がぶつかり合う時代に新しい音づくりを目指す挑戦であり、新しい指揮者像、リーダー像を具体化する挑戦でもある。「棒を振る人生」の第2楽章、第3楽章を聴いてみたい。

（平成二十六年十一月二日 朝日新聞記事による）

Ⅱ クラシック音楽は芸術と呼ばれる。確かにすばらしい作品はあり、神々しい演奏はある。しかし音楽だからといって、それがすなわち芸術だとは限らない。

たとえばイチローがとても難しいボールを高度な技術で打ち返したとき、人はそれを「芸術的なバッティング」と呼ぶ。普通の人間にはできない技をととても美しい流れで見せた瞬間、それは「芸術」と呼ばれる。

しかし、僕は自分のことを芸術家だと思ったことはない。それは周りが与えてくれる称号のようなものであり、僕自身は自分のことを「音楽を

扱う職人」だと思っている。

楽譜という設計図をもとに、なかなか思い通りにはならないヴァイオリンやフルートの専門家たちを動かして、地道に音を組み立てていく。その作業はむしろ現場監督の仕事に近い。

その僕がオーケストラに向かうときに心がけている姿勢は、音楽に対して誠実であるという一点に尽きる。そのうえで譜面をきちんと読みこなせていたら、もう何も怖いものはない。そして、演奏家たちと誠心誠意、向き合っていく。少なくとも僕にとっては、⑥それがいい演奏へのいちばんの近道である。結果的に成功しても失敗しても。

譜面を深く読む洞察力と説得力、誰もが演奏しやすい明確な指揮の技法、オーケストラの音程やリズムを瞬時に聴き分ける感度のいいセンサー、状況を判断して的確な指示を出せる瞬発力。指揮者にとって、それらはもちろん重要である。

しかし、それよりも何よりも、オーケストラのメンバーたちが「この指揮者と一緒に音楽をしたい」と思えるかどうか、指揮者の条件としては、より本質的な要素になる。

オーケストラは、指揮者の能力や人格を即座に見抜く。その部分でのごまかしはいっさいきかない。

そうすると、指揮者に求められるのは、音楽的な求心力と同時に人間的な魅力ということになる。少なくとも人間嫌いなには、できない仕事である。となれば、⑦究極の指揮者になるためには、究極の人間になるための修行が必要なのではないかと思うことさえある。

指揮者というのは、ある意味(b)神秘的な仕事で、自ら音は出さなくても、言葉では説明できない象徴的な存在であることを求められる。

たとえば、往年の名指揮者カール・ベームやセルジュ・チエリビダッケ（一九一二―一九九六年）は、技術的に突出して優れているわけではなかったが、彼らが指揮台に立つだけで鳴る音が確かに存在した。

朝比奈隆先生の生涯最後となった演奏会は、二〇〇一年一〇月に名古屋で上演したチャイコフスキーの「交響曲第五番」だった。オーケストラは半世紀以上、ともに歩んできた大阪フィルハーモニー交響楽団。先生は九三歳で、そのおよそ二ヶ月後の一二月二九日に亡くなった。

重い足どりでステージに現れた先生は明らかに体調が悪く、楽団員二人の助けを借りて指揮台に上がった。【A】、最初の二振りでオーケストラが鳴り出すと、譜面台に手をついたまま動けなくなってしまうた。

【B】、*アンサンブルは少しも乱れることはなかった。演奏前に「これが最後の演奏となるかもしれない」と伝えられていた大フィルの楽団員たちは、涙をぬぐいながら、一人ひとり全身全霊を捧げて音を鳴らしていた。重いテンポながら強弱やリズム、フレーズの変化をつけて演奏は最後まで整然と続いた。

そのときの朝比奈先生は、音のシンボルとして圧倒的な存在感でオーケストラの前に立っていた。それは指揮者の究極の姿だった。

注 *カリスマ―超人的・超自然的な才能や能力のこと。また、それらを持つた人のこと。（佐渡裕の文章による）

*混沌―入り混じって区別がつかなくなっているさま。

*冷戦―第二次大戦後における、アメリカ・ソ連間の対立。

*アンサンブル―演奏の調和。

テスト1の2

名古屋 東海中学校(平成27年度)

問1 — (a) 「妙」(b) 「神秘的」の本文中の意味として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

(a) 「妙」

ア、普通とちがつておかしい点。

イ、言いようもなく味わい深い点。

ウ、理解のおよばない不思議な点。

エ、非の打ちどころがなく優れた点。

オ、みずみずしくて心がひかれる点。

(b) 「神秘的」

ア、一部の能力ある者だけが、苦難を乗り越えて行き着くさま。

イ、神の世界に踏み込んでいくような、人間には恐れ多いさま。

ウ、本来目立たせずに隠すべきだが、特別扱いされているさま。

エ、人知ではかり知れず、言葉で言い表せないほど不思議なさま。

オ、限られた者に受け継がれる、秘伝めいた雰囲気(ふんいき)を帯びるさま。

問2 — ①「『僕の指揮者人生もようやく第1楽章です』と、出発点に

立った気分だという」とあるが、Ⅰの筆者は、これが「佐渡さん」

のどのような決意の表れだと考えているか。Ⅰの文章中の語句を

利用して五十字以内で答えなさい。

問3 — ②「トップダウン」とあるが、Ⅰの文章においては具体的に

どうすることか。「くこと」につながるように十五字程度で答えな

さい。

問4 — ③「新しい姿」とあるが、Ⅰの筆者は、新しい指揮者とはど

のようなものと考えているか。それがわかる連続する二文をⅠの

文章より探し、その最初の一文の初めの五字を答えなさい。

問5

— ④「ボトムアップの要素」とあるが、「ボトムアップ」とは「下からの意見を吸い上げていく方式」という意味である。ボトムアップのために指揮者の「佐渡さん」が意識して行っていることは何か。Ⅱの文章より「くこと」につながるように二十字以内でぬき出して答えなさい。

問6

— ⑤「この人とやってみようという信頼感」とあるが、そのために指揮者として必要なものについて「佐渡さん」が述べている一文を、Ⅱの文章よりぬき出し、初めの五字を答えなさい。

問7

— ⑥「それがいい演奏へのいちばんの近道である」とあるが、「危険な近道より、遠くても安全な本道を通るほうが結局早い」という意味のことわざを五字程度で答えなさい。

問8

— ⑦「究極の指揮者」とあるが、これはどのようなものか。「く」を持つもの」につながるように、Ⅱの文章より十五字程度でぬき出して答えなさい。

問9

— 【A】と【B】に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。ただし、この順番で入るものとする。

ア、もしくは — ところで

イ、だが — だから

ウ、また — なぜなら

エ、あるいは — ただし

オ、そして — しかし

カ、さて — すると

問10

Ⅰ・Ⅱの文章に、Ⅱ「私にしか鳴らすことができない音が鳴った」「彼らが指揮台に立つただけで鳴る音が確かに存在した」とあるが、なぜそのような音が鳴るのか。「指揮者」「奏者」という言葉を使い、Ⅰ・Ⅱの文章をふまえて、四十字以内で答えなさい。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

片巻に住む中学一年生の丘崎真矢は、飼い犬の散歩中に転倒して川に落ち、重傷を負う。だが、対岸にいた「青」はじめ野犬たちが遠吠えを響かせ、それを聞きつけた救助隊がいち早く駆けつけたことで一命を取りとめた。「青」に恩を感じた真矢の耳に、その後野犬捕獲の動きがあるといううわさが入ってくる。そして、同級生の沙雪や壮犬、獺友会元会長の与口らと犬たちを救うべく立ち上がる。以下は、野犬捕獲の決起集会が開かれた蕎麦屋で、動物保護センターの井川に真矢が食っており、言い争いになるシーンである。

「犬は、ずっと昔に人間がともに暮らしていくと決めた、特殊な動物でね。ここの野犬は、もとをたどれば、人間に捨てられた犬が繁殖したものだ。今も、かわいくないとか、いうことをきかないとか文句をつけて、簡単にペットを捨てる人はとても多くてね。たぶん、君が想像するよりもずっと多い」

ひと呼吸置くと、井川さんは真矢の方へ一歩足をふみだした。

「役所の人間はね、野犬捕獲の命令が出たら、跳ねかえすことはできないんだ。法律でそう決まってる」

「でも、なにも殺さなくたって！ 飼い主を探したり、①動物園みたくに飼ったりすればいいじゃないですか」

「ああ、おじさんも施設の他の職員たちも、できればそうしたいって思ってるさ。なにせ動物を殺すってのは、ちっとも楽しい仕事じゃないからね」

そういうと、井川さんはブルージャケットの人たちを見まわした。

「今はペットブームもあって、商売のための小犬が毎日大量に誕生している。むりやり交尾をさせて生ませるんだよ。そういう犬が捨てられて野良化し、また犬が増える。真矢くん、君は毎年、全国でどれだけの犬が殺処分にされるか知ってるか？」

うつむいて、真矢は首をふった。

「約四万だよ。四万匹殺されている。逆に言えば、殺さなきゃ毎年それだけ増えていく。そんな数、動物園じゃ飼えないんだ。飼う場所もエサのお金も、世話をする人間も足りない。だから……」

「だから、殺すしかないっての？」 真矢はもう一度井川さんを睨んだ。「山で、人間と離れた場所で暮らせるようにしてやればいいじゃないですか。鹿も猿もそうやって暮らしてるじゃん。なんで犬はダメなの？ なんで野犬ってだけで殺すんだ？ なんで野生の犬はいちやいけなの？」

「それは……」②井川さんは言葉を探すように、眉根にしわをよせてうつむいた。すると、父さんと同じ席にいた小柄なおばさんが、がたんとイスを鳴らして立ちあがった。

「あの、真矢くんっていったわね？ 私もすこし、お話しさせてもらっていいかしら」

真矢はむすっとして黙っていた。

「私ね、センターに持ちこまれた犬をあずかって、飼い主をさがすボランティアしてるの。今村といいます。井川さんにお声がけいただいてね。今回、捕まえた子にできるだけ飼い主を見つけてやるうって……」

それでね、と今村さんはいったん呼吸を整えた。

「真矢くんに、ひとつだけ誤解しないでほしいことがあるの。センターの職員さんたちが、犬を殺したいと思ってるはずないのよ。むしろできるかぎり、生かしてやりたいと思ってる。だから今回のことも、井川さんは私たちに連絡を下さったの」

「……………」

「ねえ真矢くん、井川さんに怒りをぶつけて、どうにかなるかしら？」

③真矢はくちびるを噛んだ。それは、わからないわけじゃない。この人たちにいら立ちをぶつけるのは、きつと間違ってるんだろう。しよせん、なんにもわかってない*中坊の戯れ言にすぎないだろう。だけ

ど、それでもまだ、いいたいことがあった。

——生かしてやりたいって、なんなんだ？ 青たちは、そんなふうに人間の許可をもらわなきゃ生きてちやいけいないってのか？

——飼い主を見つけてやるだって？ 青が人間に飼われたがつてるとは思えない。青は、人間に飼われなきゃ生きてけないような、そういう奴じゃない！

大人たちに、青のことをうまく伝えられるとは思えなかった。うまくいえない自分にイライラして、よけいになにもいえなくなった。

井川さんはカウンターのの方に歩いてくると、真矢の肩をぐつとつかんでいった。

「成犬で、しかも人間に攻撃的な野犬の場合、飼い主を見つけるのはかなり難しい。それでもできるかぎりなんとかしてやりたいと、今村さんは協力を申しでくださったんだ」

そしてさらに語気を強めた。

「真矢くん、私たちは野犬がいると報告があれば、捕まえざるをえない。そして施設に持ちこまれた犬に飼い主が見つからなければ、殺処分にしなきゃいけない。それが、今の社会の仕組みなんだ」

宴会の騒がしさは一気に冷め、大人たちは誰からともなく【A】と帰っていった。

真矢は力なく肩をだらりと下げ、くず餅も食べずにカウンターに座っていた。父さんがそばにきて、「おい行くぞ」と真矢の肩を叩いたけれど、④返事をする気にもならなかった。

帰りぎわには沙雪に、「明日の放課後、壮犬のここに来て」と【B】打ちされた。なにか作戦を練ろうというのだろう。真矢はその言葉を、ぼんやりと聞いていた。

「しかし、大演説だったなあ」

帰り道を【C】歩いていると、父さんがいった。

「バカにしてんの？」 カチンときて、真矢は父さんを睨んだ。

「そうじゃない。おまえのいつてること、ぜんぜん間違っていないと思っだよ」

真矢はむつと口を曲げた。だったら父さんは、なんでずっと黙っていたんだ？

「真矢、おまえ今、父さんのこと、ずるいとか卑怯だとか思ってるだろ」 真矢はなにも答えない。ずるいと思うのは父さんだけじゃない。⑤大人たちのいうことは、みんななにかがおかしい気がした。だけど、なにかおかしいのかうまくいえない。

「父さんは井川さんのいうことも、もつともだと思っからな、だからなにもいえないんだよ」 父さんはほんのすこし*口角をあげて、ふだん、あまり見たことのないような笑い方をした。

「野犬が増えたことには、片巻の開発が関係してるのかもしれない。人が増えると犬も増える。野犬の中には、片巻で犬を飼ってた人が山に捨てたのもいるだろう。そうだとしたら、責任は父さんにもある。井川さんたちはむしろ、父さんみたいな勝手な人間たちの、尻ぬぐいをさせられてるようなものさ」

真矢は、まじまじと父さんを見た。

いわれるまで気づかなかった。けれど、青たちがもとは街で飼われていた犬だとしたら、たしかに都市開発の会社で働いている父さんは、野犬たちを生みだす原因を作ったことになる。与口さんは、青は昔は山の東にいたといっていた。もしかしたら、最近東側の開発が始まったせいで、青たちはこっちに移動してきたんじゃないか？

「開発、やめらんないの？」

そういった瞬間、真矢は自分自身の勝手さにも気づいてしまった。

映画館ができるのを、あんなに楽しみにしていたのは誰だ？ 父さんとうれしそうに温泉の話をしていたのは、いったい誰だ？

「仕事だからなあ。仕事がなくなったら、父さん、母さんや真矢を食わせられなくなっちゃう。家のローンもはらえなくなるし、真矢を好きな学校に行かせてやりたいすることも、できなくなるかもしれない」

⑥真矢はうつむいて足を止めた。前を歩いてた父さんも、真矢がとりにいないのに気づくと、立ち止まった。

「父さんさあ、ちよつとうれしかつたんだよ。真矢が自分の意見をいつてくれてさ」

「意見なんかいつでも、ガキのいうことなんか結局誰も聞かないし、意味ないよ」

法律だの制度だの、街の開発だの、しよせんは中坊の意見なんかで変わりようのないものだ。そう思うと、むなしさを感じた。

「まあ、たしかにすぐに法律を変えるなんてのは難しいことかもしれん。ただなあ、人間ってのは、元来卑怯な生き物なんだよ」

「卑怯な、生き物……」

「ああ。そういう生き物であるオレたちは、自分たちの卑怯さを、ときどき痛烈に暴かれなきゃならないんだよ。まっすぐに睨まれて、なんだよ、ってな、問いつめられなきゃならん」

じゃないと、⑦ただのバカになっちゃうからなあ――。

そうつぶやくと、父さんは白い息を吐きだし、また夜の道を歩きだした。

(陣崎草子の文章による)

注 *中坊の戯れ言―中学生が言っていたいかげんな言葉。

*口角―口の左右のあたり。

問1 ――①「動物園みたいに飼ったりすればいいじゃないですか」とあるが、それが不可能であるのはなぜか。本文中の語句を利用して四十文字以内で答えなさい。

問2 ――②「井川さんは言葉を探すように、眉根にしわをよせてうつむいた」とあるが、このとき「井川さん」はどのような気持ちでいるか。その説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア、相手を子ども扱いしないで、懸命に話しているのに、それが理解されていない様子にあきれてている。

イ、青くさい正論だけを言う子どもに嫌気がさしてきて、早く会話を終わらせてしまいたいとあせっている。

ウ、思いがけないことを言う子どもに意表をつかれ、動揺していることをさとられないようにあわてている。

エ、役所の人間として動物を保護する役目を果たしていないことをふがいなく思い、自分に腹を立てている。

オ、真剣な思いの子どもからもっともな意見を言われ、説きふせるだけの言葉が見つからず、苦しんでいる。

問3 ――③「真矢はくちびるを嚙んだ」とあるが、このとき「真矢」はどのように思っているか。その説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア、せっかく自分のペースで井川を追いこんでいたのに、今村に横やりを入れられ、じれったく思っている。

イ、井川の考えも十分理解できるが、中学生だからといってみくびられたくないため、論破しようと思っている。

ウ、井川に八つ当たりしても仕方ないことが分かる手前、自己主張しづらくなったことをもどかしく思っている。

エ、今村にさとされたことで、井川の気持ちに今さら気づいた自分のうかつさを恥じ、なさけなく思っている。

オ、犬たちのことを考えず、二人がかりで自分たちだけの都合を一方的に話す大人たちをにくらしく思っている。

問4 【A】【C】に入る語として最も適切なものを次の中からそれぞれ選んで記号で答えなさい。ただし、記号は一度しか使えないものとする。

ア、ばたばた イ、しずしず ウ、すたすた

エ、とぼとぼ オ、うろうろ カ、ぼつぼつ

問5 ――④「返事をする気にもならなかった」とあるが、なぜか。四十文字以内で答えなさい。

【B】に入る語を、身体の一部を表す漢字一字で答えなさい。

問6 ――⑤「大人たちのいうことは、みんななかがおかしい気がした」とあるが、本文における「大人たち」のどのような点が「おかしい」のか。三十文字以内で答えなさい。

問8 ――⑥「真矢はうつむいて足を止めた」とあるが、なぜか。「真矢」の心情をふまえて、四十文字以内で答えなさい。

問9 ――⑦「ただのバカ」とあるが、「父さん」はどのようなことを「バカ」だと言っているか。その説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア、人間が、自分が他にどれだけ影響を与えているか気づかず、思いのままにふるまうこと。

イ、人間が、自分でできることでも機械にたよってしまい、本来備わっている力をなくすこと。

ウ、人間が、社会のルールを根本的に理解しないことで、集団としてのまとまりを失うこと。

エ、人間が、おたがいになれあつて過ごすことで、解決すべき問題に気づかなくなっていくこと。

問10 ――オ、人間が、自分より弱い存在をしいたげているのを知りながら反省もせず開き直っていること。

これまでの経験で、あなたとあなたを知る大人の意見が対立したときの話題について簡潔に示し、あなたの主張とともに、大人側の主張であなたが一理あると感じたことについて八十文字以内で書きなさい。

解答らん

(字数制限のある問題は、特に指示がない限り、文字以外の記号もすべて字数に入れること。)

[illegible]

0000-0001-9786-451X

⑤	③	①
⑥	④	②

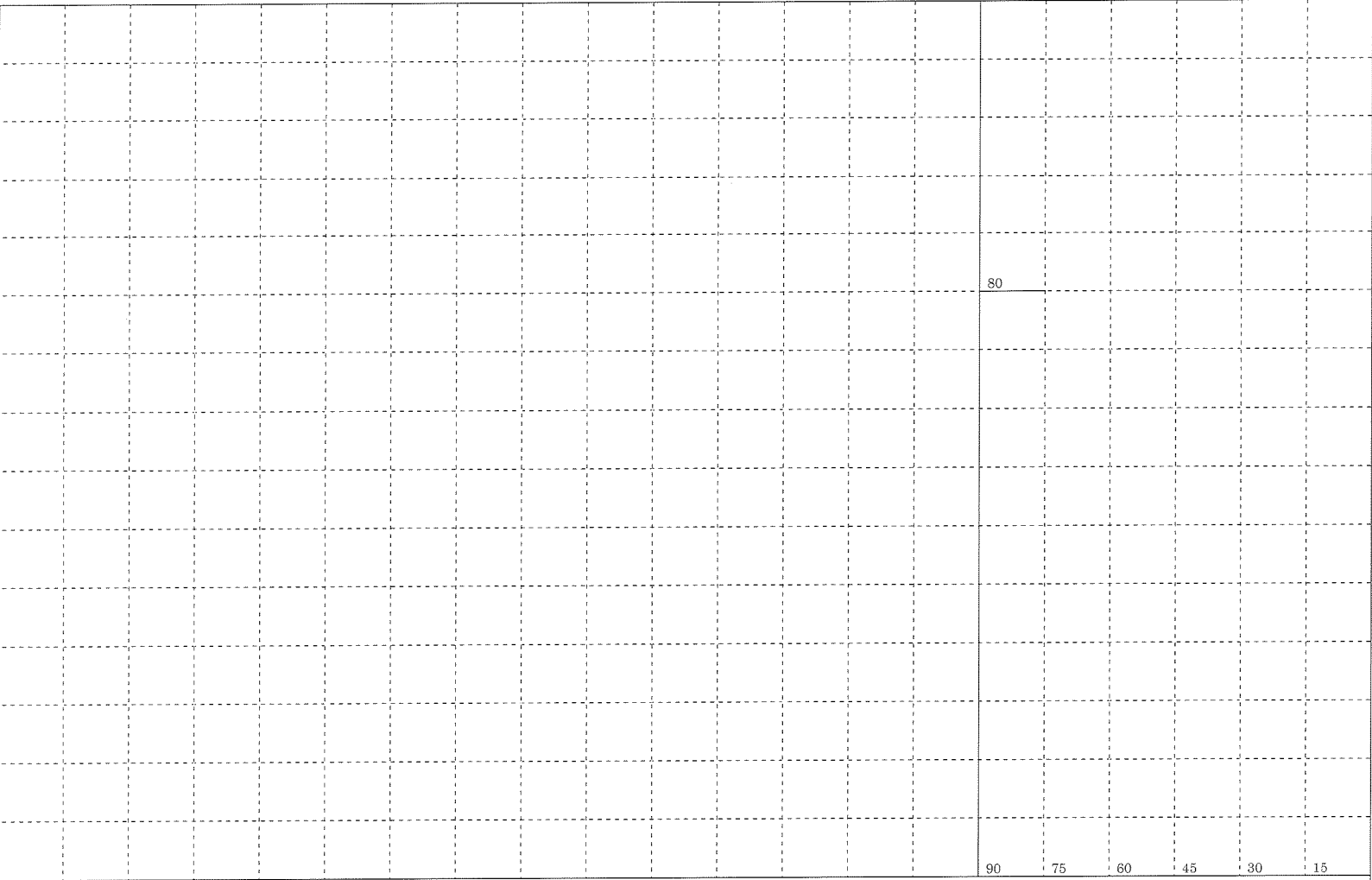
00000000

[illegible]

60000
 60000
 60000

【メモ用紙】

この用紙は、下書きに利用してください。回収はしません。



A large rectangular area for writing notes or calculations, located below the graph grid.